

馬誌

治療部

二十二

				和書門
六二	三四	一七	三九五	
冊	架	函	號	類

庫文閣内			
五	一七	和	
函	三九五	書	
二	六二		
架	冊	號	類

武備兵法

内閣文庫	
番號	和 17395
冊數	62 (23)
函號	154 455



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

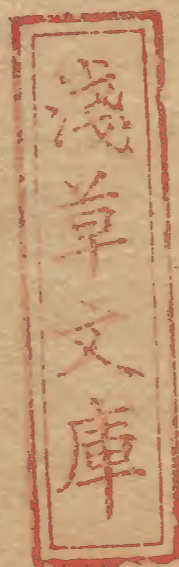


© Kodak, 2007 TM: Kodak





馬誌卷之二十二目錄
治療部



馬誌卷之二十三

馬誌卷之二十三

馬誌卷之二十三

治療部

一 醫馭の道より武士も猶更のこと衆人として
 知らしめて叶はざる事有り異國ハ董仲仙
 より御の道始まれり此人始の馬師なる
 由へこまじと馬師皇といひり生るるにりて
 理にさそく天と師として遂に馭の道と
 明らうにせり倭も大己貴命と以て祖と

此伯樂も孫陽の事なり。隋皇の流れと汲
て醫馭の道名譽の聖跡あり。穆公其馭と
稱して伯樂將軍と云ふ。夫より以來馬と
醫する人とさして伯樂といひたりとそ
今代ハ昨傳ふくして療治と云ふ人多し
義家公の醫馭の書も。既戸皇子の醫綱
本記と本として編るものあり。唐土の
書と以て深く醫療と云ふさんと。思ひ馬
経大全。穆公。安驥。元亨良馬集。朝鮮馬経

等とよみて。倭の水去と考へて療治と
かき。一倭ハ大坪流の醫馭の書あり
其門にも金花草二卷ハ金瘡の事と説る
ゆに。妙へよおも。一ろき書あり。小河兼澄の
天地関樞も心ふろき書あり。橋本道弘の
活奪集もよき療治本あり。齋藤昌陽の
療治明驗集もよく編る書あり。兼鴻並いふ
太子流の醫本もおも。一ろき事多し。
聖師の方組と見るに。君臣佐使の法と

すとも病の有るはるゝに知るる予々
多々年試しることあるあり

八候とハ一日尿候。二日尿候。三日食候。四日腹候。
五日舌候。六日毛候。七日眼候。八日息候あり。
その等一の尿候といふ小便の清と濁と多と
少とあり。二日尿候といふ糞の硬と軟と
多と少と色合とあり。從來の療馬の書
五行の說あり。皆虚誕あり。三日食候と
いふ飼の多と少と飲の多と少とあり。四日腹候と

いふ腹の張と弭と鳴と鳴さるとなり。勿論
馬ハその病を鼻にて嗅ハ人子向ひてその患
と告るに似たり。故に腹痛虫腹ふとに限ら
ず腹中患めれハ忽ち顧みてその所と嗅
と視病の在所と定めて徴^たに遠^たふ事か
し。五に舌候といふ舌の伸縮。乾潤。色の赤
白胎の厚薄。白黄焦。黄黑等なり。その色
種に^して數へ盡し^しと^しとも胎厚
く黄又ハ黒きハ腹中の滯あり。六は毛候といふ

ハ毛の乾潤。起依にて人の血色と察すると同
一車るる七に眼候とソハ眼中の乾と潤と
動と靜とちりハに息候とソハ鼻息の短速
と遲と少と寒ると熱とちりこれハ耳と以
て聽。手と當て候るる予この八候と察
明してより馬に考へ合て見れハ世間の馬
醫の診察より明にして知易く申らば
とりふことか一よりや證と分て六と云
數百病ありと云とも其原ハこの六候の外り

出す六候とハ門外。虚。實。寒。熱。なり門傷より
外患と云々多一まさ、外症より門症に起く
るり虚より實候とありらばあり實より虚
候とありらばあり又實より熱と生るあり
虚より寒と生るあり又熱と生るあり諸
症とも多くハ消化の機轉くわんに妨ありて腹中の
壅滯より起る多一いづれにも前の八候と云
つて其症と徴一藥と與ふ一よりて劑と分て
四つと云寒。温。補。浮。なり劑各三等と制一十二

方と以て衆病治するに運用して缺ることか
一 竊に考るに馬も陽鞞なるその病多くハ
鬱熱の壅滞を生ず薬劑も人とさして異同
なく別して大小便の通利に意を用ると第一
とを決して馬醫の空論に拍り泥むべし以
今かく簡約に治法をたてて試みに大要は遠ふ
事か一 其外糞つまりに薬を塗らふても速に効
なくハ竹の唧筒（うすき）を以て醬油の中へ芒硝（まうせう）ハ
焰硝四五匁を入る火に融して肛門より弾き

いもよく油とさしてちもまきよし 鍼とさし
て血をとる事も仕覚へて置ハよき事あり
灸ハ人に阿（あ）是（せ）とて病の在所へ灸せしむること
あり灸ハ馬に効あれこれよくあふふく
用あへしその外金瘡の手当開孔の法あると
りあことも専門の徒に学ひよきて作略を
されと彼等う空論ハ採用ひかして此篇に其
方と記さるハ唯これ予一人の試験のみか
れハ毒に用ひて害あらんことと畏れられた

其馬醫の古方と論辨——稟略と記そのみ 厩馬新論

一 陰陽盛虚といふ事あり氣のめぐりひと
くさるゝといふなり大過といふ陽氣の盛るゝ
といふ不及といふ陰氣の盛るゝといふなり
陽盛にして陰虚なるなり陰盛にして陽虚なるなり
各形状あり証見分へ——陽虚——と血氣と滞ら
しむる也(毛次あり)——肌こまやろく陰虚——とハ
氣血とと(何れも)むる也(黄と生)——瘡と生は
毛次あり——肌をめらろくは眼——冷ある

泪と流すありまゝ後足の腿腫る物あり

是と陰陽盛虚の症といふ古人のい(下)り 馬術要覽

五勞といふ事——あり血氣助皮骨の勞れと
よせろく五勞といふものあり血勞とハと(下)と(下)と
一(下)して馳驅する由(に)其勞とあるなり氣勞
とハ汗いまず止さるに(下)又乾うは(下)事(下)度(下)
よ及(下)其勞とあるなり筋勞(下)久(下)く(下)歩(下)遠(下)
く(下)行(下)事(下)数(下)ち(下)れ(下)ハ(下)筋(下)勞(下)る(下)あり(下)皮(下)勞(下)ち
汗(下)久(下)く(下)流(下)て(下)止(下)さ(下)る(下)ハ(下)皮(下)勞(下)と(下)ある(下)なり

骨勞ハスーく立て骨とこづくするう也了
具勞とあすなり皆善人の心疎なるう也
一 痛とこしてさう也その勞とあまことあ
一點痛とこも事あり善人及び伯樂ハ控え
心と附て走るつこ事あり頭と上て點
みのハ膊尖の痛かり頭と平らうにーて點
するハ膊樞の痛かり頭首ともは點するもの
ハ兼重の痛かり頭と低て點するものハ天田
の痛かり前足を移ーかきハ瘡風の痛

なり空と走らうことく飛て地に足と附さ
るものハ漏蹄の痛かり蹄と低きう如くして
まゝ蹄と引て點するハ蹄尖の痛かり蹄
よかり點するハ蹄真の痛かり腿と並よ
して走るハ膝上の痛かり腿と曲て行
節上の痛かり胃頭に脚と高く取て點
ものハ瘡風骨の痛かり頭とあけさうか
しと點せさるハ蹄頭の痛かり坂と下るに
滞あるハ胸の痛かり道路と行は静過さるハ

外眼の痛かり又外まひつめと向て踏ハ裡眼の
痛かり頭と懸して行ハ脚上の痛かり頭と
キ拂て行ハ膊上の痛かり脚と引て走るハ鷹趨
掠草の痛かり脚と引て行ハ燕子尾骨の痛かり
後足と疼して行ハ鵝鼻骨の痛かり脚とつらぬる
如くにして行ハ肺把五攢の痛かり脚と並に引て行
ハ濕毒の痛かり腰と仰くして行ハ鷹趨の
痛かり腰とさくけて行ハ脊筋の痛かり
腰とおさめて起さるハ腎の痛かり後足と

移しうきハ腎経の痛かり把前ハ傳経の
痛かり惣して馬に痛あるるハ乗人のあや
まきりあり急^たき馬とて鏝と以く角と入て
脾胃と痛め骨と碎く弘鞅ま^くハ鞅下よ
物と敷て脊梁骨と痛めま^くハ別竹キ持と
以ていますめキとて皮肉と痛めて終る馬の
煩とハあることあり鏝と留る事ハ馬はあよの
為そや常馭にハ其益ハすこ^くあまことも軍
馭に至て其益あ^らゆ^へに鏝とハ留付習ひ

とるこことあり古人の心根と知らす傳あきく
ゆへに物さ毎に過失多うりるそりよく
く其道と習ひ事へきことあり

一馬と持者ハやう療養の道と知る一物さ
とも深遠の術と苦々學あま及らざる事あり
只血と利一―夜眼と焼。或ハ虫氣。腹痛。赤身。
折き等の業と知つて事たる一―官中要録
汗と見て乗程とりさまふ一―故實多一
といとも凡五汗と程とと一―胸掛つく

一―に出る汗と一汗といふ耳の根に出るを
二汗といふか一―休む一―尻掛の掛と一―
に出ると三汗といふ折筋志らく休む一―
あまねきと四汗といふより一―休む一―
小雨普くう濕候の内より白露の如く
こぼるハ五汗なり宜く休て藥治も又せ一―
一―も一―う簡と誤りてハ馬命危一―よく
心乃一―事あり 母都馬具佐

一十二経絡七情六淫ハ人と馬とハりる事なり

一 志うれとも馬にハ膽カ——兔に脾カ——と
世にいひりり——馬經大全にも此ことを
説り人馬との療治にすこ——の差
別あることハ人ハ五臟六腑馬ハ五臟五腑カ
なりこれより馬醫の道も分ちある事に
ありと云なり 馬術要覽

口色を見て四季旺分の病と知ることあり
口色桃色の如くありハ無病健馬なり其口
色變りて春青色ありハ肝の病なり夏赤

色ハ心の病。秋。白色ハ肺の病。冬。黒色ハ腎の病
あり四季皆下血に黃色ありハ病脾にあると
知——まことに伯樂の心と付べき所なり

一 世俗にたいむとよめる大坪流にハ腑返りと
云ハ條にハ太馬とゆゆ——ハ夜にてハ駄威馬
と書り又或人語るにハ大塙とて東國にの
こあるといり安驥の説にハ大魔と記す此
神。雲中にあり時々馬眼とふきき進豆
もよとみもやむれハ鞍下落付す倒る

馬の如くにして嚮と情を惹きゆくみ立
所に精神みされて死せらるる倭小も天文
十五年の夏五月廿四日。將軍家。畠山終理
大夫義忠を以て愛宕山へ由代末の使として
其前に至るや向のおろく下松の邊りまで
一女忽然と来りて畠山へ乗馬の嚮と取
笑ふとひとしく馬忽ち倒れ死てりり
抑此たい馬といふ神々魔障ういまさ弁へ
かごり馬經大全に馬即死心肺の絶症と

とけり大坪流にりあるは實をア倒れ
たるとき針葉の法あり


一 畠永甚四郎殿に馬の息合の鍼教へ給へと
請ひけるに鍼へ入秘傳とりといひとも相傳
するあり其故ハ一年

家康云箱根山と通りて駿河へより孫ふ
り既に市馬つうれてあゆまるとけとき
と具しる人の中に鍼と持するものありや
と尋ねしに畠永殿の親類に鍼持合せ

たる人ありて私にゆとしてまのふせあくる
家康云其感ありて其鍼にて即ち馬をた
まけて乗給ひ伊豆三崎まで着給ふとあり
け鍼のさし一兩。知つてありやと其鍼の主人
家康云尋給ふ申り一兩にある鍼にて某
も存知とると申し上り給へ

家康云其人と近く呼給ひて人の聞所に
てハ幾所にもあるといふものあり二所とさし
ていふときハ人習はすして知るものありと仰

ありとあり其鍼の主にありひたること
疑ひありとて寛永十六年三月八日に相
傳あり此鍼所に曰く馬の耳左右ともよ
中と取てをり真中の筋と鍼にてさす
一其筋ハ此圖の筋とさす一若
くハつきぬきても鍼あれハ苦くはさす
又耳近とすくよのへての根の方にある筋
に鍼一つさす一鍼ハ此毛のありよさ
すへきあり亦くちちうへさんすにハ是ハ

脊骨のつきにさす一とありけ鍼をくりハ
血取に習(と云亦曰く)さの鍼のこと其痛
む方の耳の肉の筋にさす一とあり右
いつれも其鍼所ハ  跡足の時ハ此所あり
前足の時は所あり 何も
治療鍼にてさすあり 翁物語

一 或人一つの薬と知りてひさすこれと秘方
とせり誠に馬薬の病に對して功ある事
奇妙不思議ありさけ故に尋ね定易年久
彼薬と執心して乞うけられ源氏牡蛎散

あり其傳にいへるハ蛎のきと七度焼ます
其度毎に薬の汁を付てハ焼七日の内は十
四度焼あり其後よく粉よくて馬の口を
洗ひ右の薬を摩付。上戸の馬にハ酒よく
用ひ下戸の馬ありハ水よくて飼一馬の
旋毛のさくりたると上戸と一ありたる
と下戸とある 馬術要覧
一 凡馬の病本腹をれ別起ありりみあるひ
してぬる粥と好むものあり病軽きにハ半時

過て粥。一時過てぬらとサ一かひいよく本腹と見もサ一つ細く飼一病重く一時過て米の粥とサ一かひよく又ま時同とるく又米の粥と寂前のより濃してかひ程るても同遍と見も其後常の粥をかひいよく本腹と見て食と好まハ糠とあしつ飼一食と好む心あぐハいつ近も飼へくはて菜と飼一

馬書拔萃

一 寒きよむひて馬と遠路へひく時ハ必以

内羅と煩ふ事ある一其とき茶持さる人ハぬきの白根と湯薬して焼味噌と摩合せよき酒とつりてさい飼一暑季の折くハ朝ここと胡椒と三粒ハ竹の筒よ入く水そ飼一殊ハ口と洗せ息合茶と飼一

馬術要覽

一 病馬起卧とみるに後の足つよきハ病つよく見ゆるとも軽き病あり後の足よきハ病醒くこも大病あり病後にかつと快く喰ひ

日救と経とも後の足弱き間ハ兼へくさる
あり馬書拔萃

一 土水。有銀。又ハ酢あとして飼業あり用ある
事ありれ馬ハ離の卦に當りて外太陽に
内陰ありさるよりて強き浮業。強き寒業
と用あるしきちぬすあやまらざるへ
まゝ。胤薰と組む方。唐去の馬書に見ゆる
然れとも本草編目より馬の毒ありと記
せり其方組と察して用也
馬御要覽
下同

一 旅路をたにて馬俄に目と頬ふことあるハ
兼の葉とあこ出して其汁と目の内吹か
くれハ直るものなりあして摩目。突目に
ふれてす

一 大石ふとに走れ或ハおと一穴ふみこ橋
板のりれめふとは踏込豆の骨と打事あり
然る時ハ折る骨と押合せ揚柳と粉に
て骨の髓中に入れ柳と細くけつりて
糞にあみ乾姜と粉にしてつくへ右の

箕子てよく巻く一日も二三度ほど小伎と志
かく一馬とあさくら事あるは要馬秘極集

一 即ち馬とを―おこして其まゝ乗ることあるれ
度とあつて飼ふる馬控以て乗さるゝの
かり其馬と乗れは必中たいむに逢ふと
古き乗人のいへり誠あるる大坪流より
ある大腸の腑返りと沙汰―ける故さもあり
ぬ―馬術要覧

馬の湯遺ひハ助言つくにかかると瓜と

葉―あけ蔓と入葉―其汁にて度つ
うふあつにハ赤茨の根と葉―その汁を
つよ詰り馬ふきき酢とよ―せとあきこの水
よてもよ―あのをよて用ひてもよ―尿つまり
のとき酢にてあけび蔓と葉―其汁
よそよ―息合にハ口と洗ひ舌にぬるま
遠方へ行時ハ梅干と縮よ包み銜のまみよ
ゆひ付らあり此葉ハ今川氏真の秘方あり

り箱物語後集

一 寒中より川と越ふとの時馬もまじくこ人も
糝以てあぐえ働まかくりそのまゝ方に温
益丹といふ薬と以て馬の下腹四足百會に是
とぬりて人も手足に付てらるる液をこり
是とぬきをこりてらる事あく寒の煩とるき
さらぬのありその薬方ひひの

- 丁子 二兩
- 附子 半兩
- 干姜 二兩
- 胡椒 二兩
- 良姜 二兩
- 夏草 半兩

右細末ふしてまんていりにてあらくぬりて
用るあり 要馬秘極集

一 馬の頸病にハ蘇香圓か——をりせりあきの
水にて用也
手負にハ肉の傷ハ疵とおもは療治す筋骨
の手負ハ肉菜とおもに中へ——老馬食う
とみまらにも拍ら事ありれ
一切の疵洗葉藤こぶを煎——ぬりて
洗ふ。

矢。又ハ槍の疵にハ穴の奥と山のいもとすり
て洗ふ。一。一。丸も疵の大ふまよる。一。
子負馬。腸出さるにハ藤こふ。車前子よく洗
ひ押込て馬の尾にて疵口と寄せ括り其上
に生れ子の糞。椿の油。水銀と糊よく交せ疵
厚とお紙として塗て張るあり勿論子負養
生の中勤うも事あり

血苗にハ垣と結ひたる至て古き繩と末に
一十文。胡麻一分。麒麟血。耳うさに二つ調合

して附る

子負内茶にハ當歸。白芷。紫檀。地黄。芍藥。川
芎。川骨。肉桂。各等分。耳草中。右細末酒と水
と半分交せ朝暮二度に用ぬ
凡裏と痛むハ多く豆と上るあり膏藥とナ
り糠に胡麻三合交せて飽あり
息合に人參四文。肉桂。丁子三文。梅干の古き
肉をすり十文。耳草一文。蜜ねりにして軍中
にハ三分用とつ。鑢に塗て乗る。一。終る。つ

あき置きよく口と洗ひ又新に鑢にぬら
あり

又脂返しふも此薬と酒にてとき五女用由
馬眠らば薬の中はさると知る

馬の目と白くするハ蝸牛と子腹よそ
すりつゝあし。まさの上より搥れハ翌日より
目白くあちなりこれにハ大根の志ろり汁
に好き酒と入れ度く洗ハ平愈し
まゝかきと目の形に切。目にあて括り

置ハ平愈し 是人と眩惑はる者もあれ
心符の爲うし記せり

奇功丹。急病頓死に水よそ五分用法ハ人參。
肉桂。丁子。滑石。各一兩。龍腦二分。沈香一分。甘草
五分。辰砂三分。細末にして蜜わりにまざる
あり

凡痛み者搦れにハまんていつけてす。又
馬上にて馬足のとけや直すよハ兩耳の
間を小刀よそ三分厚とつくあり

息命丹の方ハ細烏の腸と去りその中よ

うつきの葉と葉の葉。麻の葉。紅花と入れ藤
うつにてもとひ黒焼にせら草ハ等分あり
活命散ともりふ

龍腦。麝香と少一加一密に包み罈の端に
括り附へ騎士用本

一人虫丸

大延秘方一剋相傳。肢の病。中風。筋病。歩身。
五淋病。尿結。結馬。虫よ吉一亦曰く息相諸
病よ吉一飼汁口傳

人虫ニツ 龍腦一両 枯葦根一両

草搔半両 甘草一匁 水金一朱

右細末にして糊よふのりと押合●是程よ
丸一葛粉と衣ようけ七日おいて病馬に
刻之用也粒飼汁よ心ほある一

飼汁之事

肢の煩よハ 鬱金と煎一用也

中風よハ くらたみと煎一用也

筋病よハ くらたみと煎一用也

赤身あかみ 石見川いせがわととくくきて酒さけそのその用もち

尿うり結むす木通きどおとと煎せん用もち

結馬むすま 榎木えのき母ははとと煎せん用もち

息いき 黎蘆れいろう人參じんじんとと煎せん用もち 要馬秘極集

一 息合いきあとと辨わとと一一生せいああおお呼こ吸そのの和わ順じゆんとと
命いのちとと一一行ぎやう程ぢやうややかからら一一馭ご馬ば奔ほん走そうのの境けい
前まへももわわささ後ご順じゆんのの志しをを隨したがふふ馬ば命いのちををりり逆さか
ののわわささにに隨したがひひいいりりてて安やすららるる一一ささ夫つま順じゆんととハハ五ご音おん
のの端は正ただららりり凡たゞ手て綱なわととひひくくてて志しををりりとと赤あか

一 渡わた一一序じゆ破ぱのの足あしををかかららぬぬ境けい前まへ 吻くちととああきき
衝つとと志しのの呼こ吸そのの和わ平へいとと宮みや息いきとと一一喉のどににああ
ららとと高たかとと一一宮みやにに次つぎてて徒た回かい一一吻くち張ちやうとと角かく
とと一一少すせせままららとと心こころ得とてて休やすままるる事ことハハ會あ釋はなああらら
一一舌したををああてて息いき荒あらら舌した呵かととくくハハ微こ息いきとと
一一大おほ半はんせせままららとと辨わてて境けい節せつ暫しばくく休やすままらら
頭あたまにに入いりりとと羽は息いきとと一一究きゆうててせせままらら喘あららりり宜よろ
くく休やすままららてて薬くすり治ちのの了りょう簡かん於お宜よろ一一息いきにに馬うまのの
五ご息いきああららとと聚あるるとと一一羽は息いきのの難がたにに均ひとささ

あり、且くはて針薬の了管欠ことあり、も
或は境により馬より角。徴の留は一息絶る事
もあり、大息絶る患あり、さあれとも死
する事あり、あうす。馬書抜萃

息合薬として伯樂の用るるあり、古ハ源氏
の赤茶といふハ赤龍丹今川家の秘傳 黒茶といふハ
息命丹の事あり、人馬より用ゝることあり、
か、右の茶と好まざるといハ人より用ゆる事
付にまされらるゝ。馬術要覽

一 延息丹。息合万病にす。

人參 茯苓 辰砂 桔梗 朱砂
香附子 麝香各分 木香 沈香 丁子
良香 甘草各分 胡椒 竜腦ニ朱
金薄五十枚

各細末にして煉蜜にて煉合。一宿置て用ふ
り

飼汁之事

筋氣ハ烏瓜の根と細末にして一粒子茶

三服程と酒よて半分。よて半分二色と一ッ
にして天目は一盃飼一

結馬よハ 白水よ砕よさ一ッ飼へ一又よ
冷水よても飼らう一粒●是程よ丸一一粒
ッ飼へさるう 要馬秘極集

一 馬の奇薬。雉子の雌の足と取集て黒焼に
してせくぬきの水よそのまにへ一ッいさる頻
病にもよ一 軍用心得之記

一 金沓あとい切蹄裏の痛に用おる薬の事

鹿角 黒焼 五匁 鮫腸 黒焼 五匁 女の髪の落

黒焼 二匁 五匁 鉄のやすり粉 五匁

一 右細末に一ッて猪脂とわう一ッさるさ松
脂と入れよくわき合たる時右の粉サホと
いれよく煉てかこくハ猪の油と入れも一
あるくハ松脂と入よく煉合せ其後水よあけ
取らうあけうけんに心と付へさるう 要馬秘極集
一 沓すりサホの事

牛皮 黒焼 犬頭 黒焼 各等分

右と細末にしてひねりかきあり但し
胡麻の油にてぬりても付らあり

一 沓巻ハ泥道ホ石道ま取らるる瓜摺れハ
却るつまつて瓜摺れあるにハ瓜摺れも

之付へ

騎士用本
下同

一 折目の馬ハ用まきかきしも市薬ハまんていろ

一 息合ふとみ菜の事ハ下りてハ
まら膏薬と付ハ市薬ハまんていろ

荊蘆 三色

沉香

白木

人參

石菖根

塩硝

梅干肉

黒焼

右等分と細末にして筒に包み薬のはみ

あひに是とつけ或ハ軍馬のまらるるに

時節ハ垂て付置棄るつきものあり要馬秘極集
下同

一 息養散 萬病も用

桃白皮

茯苓

白木

良香

各一両

桔梗

輕粉

仙人草

各一両

威靈仙二両

右細末にして万病のまらひやくと用也

飼汁の次第

飼一

兼息絶たるとに 荊蘆の三色と加へ冷水を

用也

一 毛生茶にハマコシの黒焼と膏茶と練合せ

さて毛の生さる所と熱湯をたて糖針と

さして付へ 馬御要覽

一 馬の口切とると治す茶女の髪中に入る

こまろの古く油をこすと黒焼に

さるはう等分まて付るいり事妙あり

安齋漫筆

一 馬の腫お散一薬の事

巴豆 五八霜 夏草

右等分にしておろ免の油にてわり合せ糊紙

と二寸四分四方に切て右の茶とそくいにと

一ませ其紙に厚くぬりてたと六腹の邊の

腫おからハ百會に是と押付置へ一或胸平

首の邊からハとろかみの上に付置る毛ふ

うくハ其を程そり落して付へ一程ふく

腫ひきてちるものあり 要馬秘極集

一 戦場にて用也へき馬の息合の葉ハ梅干
の黒焼に五八葉と加布に包み馬の上口の
くみに結付へきなり軍法義葉集

一 馬の口羅の薬

人参二分 茯苓一分 干姜一分 陳皮一分

右を細末にして酒にて一筒に一錢月石と入
一度に七筒。朝夕七日に飼へ要馬秘極集

一 人喰馬の薬ハ庭鳥のうーを雌のふん子厩
内の男女のふんと等分に合せて井の水とて

飼ふ一但一百日後ハ起るるある一
同断の薬さのりさらららさんせうとふやく
右の四味と如何も煎して筒に入れてね
をきやうふ一筒にて口は強くぬれハ直る
あり又麻のみ五合。濃茶三服回と酒よて
すりて飼ハ三日又七日回とハ喰止むものあり
又艾に火と附て口ハ入るあり又めらるり
と黒焼にして飼ふもよ一
大坪流馬之書

一 四足平用の方

活薑根 かむしの根 ぐし

右と等分にしてすり合せ塩とかり加へ
四足の頬に付るあり要馬秘極集 下同

一 馬ととせ或は柔たをり強く身と肝腑
返すことありたよれ臥てはいあり車
あり腑返りあり

白檀 紫檀 杏仁 山梔子 沈香 附子
右と各等分。細末にして冷水にて用ゆあり
一 血の落たるに用ゆる業

かぶ 野うむ 塩 土器 各等分

右とよりすり合せ酢とときき血のある
上よひこと引

一 馬のすりこり背とすりたる時の付業三
年味唐かき五平 黄柏サ入黒焼
よして付るありいり車 妙あり要齋漫筆

一 首着和名むまと白胎よく煉り折るこきは
馬あし驚う以筋骨強くなり人より馴る
といふ 武学拾粹

一 火の粉の掛りしるにハ田中の泥。下水。溝多との泥と付てよるしきあり騎士用本

一 官位令曰馬醫師職員令。左馬寮條曰。馬醫二人。

東鑑曰承久元年六月十八日。武藏太郎秘藏馬。一兩匹於宇治中矢。其鏃込身中。于今不出之。愁雖不弊。太辛苦。雖訪諸人。稱無其治術之由。生虜西面中。有友野右馬允遠久者。飼馬之藝可謂古伯樂。聞此

事可治之云云。武州類入興。則引送彼馬之處。拔鏃療養忽得愈也。珍事。世以謳歌云云

塏囊抄曰近ころ小河乘澄こそ多復の伯樂にて安驥といふ名書と作ころ

按すに塏囊抄は近ころとハ文安のころあころや安驥ハ日本書にあころ小河の作書ハ假名安驥集の事あり肥後國は平仲國といふ馬醫の上子あり

其子一安驥。眼心とて二人あり親子
三人の論と仲國百問答と号して書あり
中興素鴻新右滂門仲綱。馬醫に之が
弟の人あり尚時素鴻流と稱して其業
と相續志と号するもの多し

本朝武林原始

素鴻

BOOKS
壱

